

昭和60年11月10日

第37号

尾瀬の自然



第37号 85-11

発行 昭和60年11月10日
(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)



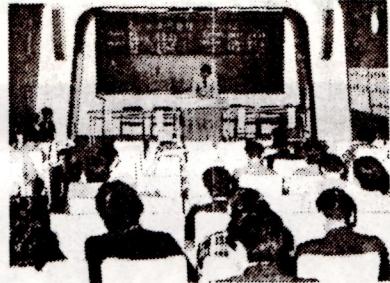
小沢平からみた燧ヶ岳

尾瀬の自然を守る会

第3回自然保護シンポジウム（福島）開かれる

福島で尾瀬の自然保護シンポジウム

生物学者や愛好者活発な意見を交換



自然保護を求めるシンポジウム

(福島民友より)

「尾瀬をめぐる諸問題」をテーマにした第三回自然保護シンポジウムが六日、県文化センターで開かれ、生物学者らが尾瀬をはじめとする自然保護の在り方について意見を交わした。

同シンボは、群馬、栃木、福島三県の尾瀬愛好者が集い、尾瀬の現状と将来を語り合う目的で三県持ち回りで開かれている。本県での開催は初めてで、県自然保護協会（星一 彰会長）が主催した。

六日のシンボジウムには同協会をはじめ尾瀬を守る連絡

協議会、栃木県自然保護団体連絡協議会、尾瀬の自然を守る会などから約三十人が参加、それぞれの代表者が発表を行ったあと、ディスカッションに移った。このなかで、参加者は尾瀬を取り巻く環境について「マイカーを利用した観光客の安い登山と自然を観光資源として利用しようとしている行政の対応に問題がある」と述べ、自然保護の重要性を強調した。

奥鬼怒スーパー林道の現場を訪ねて

飯箸 章子

奥鬼怒スーパー林道が開通する前にどうしても行っておきたかった鬼怒沼原へようやく行くチャンスに恵まれ今回の視察に参加した。

山を切り開いて道をつくる。

そこには短時間に重機で削りとられた生々しい傷口があった。悲観的になつてはいけないと思いつつ直径一メートルもある巨木が切り倒されているのを見るあまりのむごさに目をそむけてしまった。そこには建設現場からも大木が切り倒されたり破壊という言葉の冷たい響きが重く心にのしかかった。

普段何気なく利用している道路も同じ運命をたどったことを今になって知る。便利の裏側に隠された大きな犠牲をしなくてはいけない。私たちも地球上に存在する一生物にも地球に存在する一生物にしかすぎず、かれらからうける恵みに支えられていることをわざとではならないと思う。

道路の建設が関係しておこった災害は南アルプススーパー林道をその代表とし、今月二十六日長野県地附山で発生した地滑りも遠因として戸隠バードラインをあげている。自然のもつ生活環境をむりやりコンクリートで圧迫すればそのしつべ返しをうける事はさけられない。自然を支配しようとすることは人の愚か

るだろう。そうなる前の鬼怒沼原を見ておこうと思つていた。

日本で最も高い所に位置するこの高層沼原は規模こそ大きくないが多数の地塘が点在し、タテヤマリンドウやコツマトリソウが咲いていた。標

高二〇〇メートルとあって植物の開花に遅れがみられ、イワショウブはまだつぼみの状態だった。尾瀬ほどのはなやさはないがシーザン中とあって木道の上にはハイカーがまばらながら列をつくっていた。ほとんどのが栃木県側から入山者である。一見、平和そうに見える沼原に営林署が設置した高さ六十センチメートル前後の底のない赤い円筒形の灰皿が景観を害している。

アーチ橋にかかる川源橋、何でも自下工事中のスーパー林道の一部だが、バーベキュー場から鬼怒川に沿つた小道を歩くこと一時間半でなりついたところです。七十五歳の父が数十年前に来た時は、道らしい道もなく、川を右に左に渡りながら無人だった小屋に着いて温湯にひたつ話を聞いていましたから

最近の温泉ブームとともに、この不便な温泉も若い人たちであつていました。その上どんな道路がすぐそばを通るのに、なつたら、たちまちのうちに平凡な温泉街に變貌するでしょう。宿の人も祺い顔で「こんな道ができる」と嘆いていました。

温泉（ほんそ）を離れて大気中にひだりだく音をかけてくるのです。観光開発を優先する窄狭（せきやく）な道路づくりは、心の平安を求めてくる人々には迷惑な話です。

さであり、自分のくびをしめているよう思われる。一次的な感情に流されることなく永い目で人と自然が融合して生きてゆくことを考え、今回の工事を見守りたい。

観光開発優先する道路づくりは迷惑 小糸市 片山 由紀子

高校生講座に 参加して

出川 洋介
神奈川聖光学院

ミズバショウが有名で、ナガバノモウセンゴケが自生している、とても景色の美しいところというのが、尾瀬に対する僕の浅い知識だった。今回、尾瀬に来るのは全くの初めてである。

講座の日程は、八月九日鳩待峠観察、十日尾瀬ヶ原観察十一日至仏山登山。宿泊は二泊とも鳩待山荘。原への影響を配慮した上でのことだそうである。指導は坂井崇浩、生方純夫両先生。受講者七名。

鳩待山荘裏手の鳩待通りは尾瀬の中でも特に人の来ないところだそうだ。主に尾瀬の森林を構成しているという三種の樹、ブナ、オオシラビソ、ダケカンバを確認することができた。ブナ林とオオシラビソ林では、照度計を使って林内の明るさを計測して比べてみた。

ブナの原生林では、草本層から高木層に至るまで様々な過程のブナが見られる。陰樹としてのブナの特性、そしてこの林が安定したものであることがよく解った。しきりにチョリチヨリと鳴いている。人によつてはこれを、錢取り錢取りとも聞きなすそうである。声はすれども姿は見せずといった感じでなかなか姿を現わさないわりには、そこら中から鳴き声が聞こえてくる。メボソムシクイである。鳥の鳴き方にも方言があるそうで、坂井先生によると八ヶ岳のメボソとは幾分違つてゐるそうである。ブナやオオシラビソの梢には、カラ類の一団がやってきて、又どこかへ行つた。小さくて見にくいが、葉の先などに身軽に止つてゐるのは小柄なコガラとわかる。

主に針葉樹は岩などの多い所に浅く根を張るようである。地表にもごつごつした根が半分むき出しになつており、下を向いて歩いていても気がつく。台風のときなど、深く根を張つてゐる広葉樹が幹の途中から折れてしまふのと対照的に針葉樹は根こそぎ、ひっくり返つてしまつ。大きく見ると、トチノキなどが出てくる。尾瀬では表日本と裏日本の植物標高、湿度等の関係で、ミズナラやダケカンバ、ハルニレ、トチノキなどが出て来る。尾瀬では表日本と裏日本の植物が同時に生育してゐる状態も見られ、分布上の重要性も兼ね備えているとのことである。みんな尾瀬の美しさを求めて、やってくるのだろう。この講



座の僕にしても、普段着で軽い足取りでやつてくる人も、あるいは登山者にせよハイキングをしに来た一家にせよ、誰もが根本的には同じ思いで来ているのだと思う。自然観察を目的としたこの講座では、幸か不幸か、先生の指摘により様々ところで病んでいる尾瀬を目にすることができた。しかし、そういうことは指摘されてみると解らないものだらうし、あこがれの尾瀬を訪れる人にとっても視野からははずれてしまいがちなるだらう。

尾瀬はその美しさと共に、学術的にもすばらしく貴重なところであるが、実際には同じような湿原地帯は北海道にあるし、アラスカでは遠くと続いているとの言だ。では尾瀬を守つても無意味なのではないか。尾瀬を守ることの意義は地理的な重要性から單にそれを保存するということにとどまらない。尾瀬を訪れる人々の尾瀬への理解を深めてもらうことにより、自然に接する人間のあり方から考慮していくこうといふものであらう。自然保護のあり方として、とても望ましいもの

おこっているか！

ます手軽に多くのハイカーがやつ
を確立すべきだ。



湿原保護の木道も、修理のたびに足ゲタができ、棧橋常になり尾瀬の景観を壊している。



土、日曜日には、湿原上は人の列で
うまる。何のために自然を求めてやつ
て来たのか。まっすぐの木道ではなく、
拠水林にそって木道をつけかえる意味
はここにあるのだ。



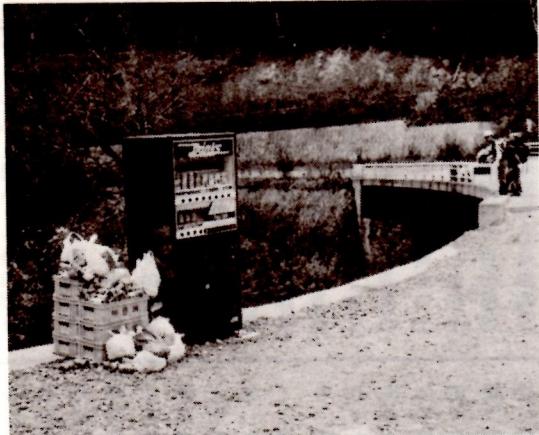
木道整備とはいえ、貴重な湿原上に無
造作に置かれた資材。湿原での作業は
きめこまやかな注意が必要ではないか？



尾瀬観光キャンペーンボスター

尾瀬で今何が

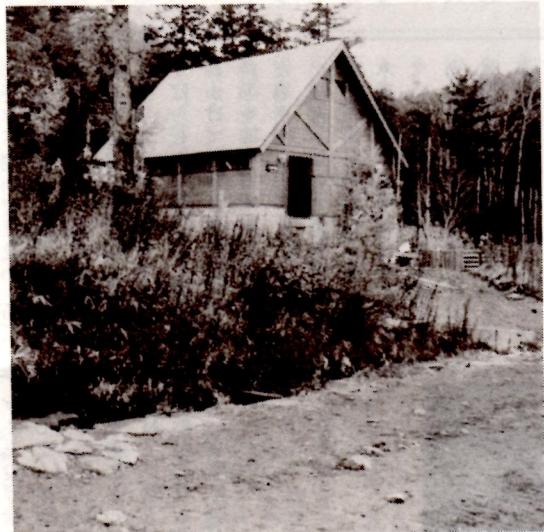
尾瀬は交通網の整備によります
てくる。早く抜本的な保護対策



尾瀬の玄関口、一ノ瀬の橋のたもとに
は、ジュース類の自動販売機がおかれ
ている。尾瀬にはふさわしくない。



人の踏みつけによる、湿原の破壊(ア
ヤメ平)。湿原保護の関係者の20年
の歳月と多額の費用をかけたが、復元
できない。



長蔵小屋前庭の清水の湧きでるすぐ近
くに、大きな便所が完成した。尾瀬の
メインストリートに面して、大変目立
つので、設置場所としては大変まずい。



尾瀬沼畔に巨大なビジターセンターが
改築完成まじか。
尾瀬の核心部にこんな大きな工事が果
たして必要なのだろうか?

たと思う。この講座では、その重要性をじっくりと観察、体験すると共に、尾瀬の望ましいあり方を通じて、自然保護という問題について学んだ。

高校生講座に参加して

松浦 聰

群馬県立高崎高校

六月の地方新聞でこの講座のあることを知り、少々ためらっていたのですが、思いきって応募しました。主に外国语の学習と書いてあったのがひつかつたのですが、かねてから尾瀬のすばらしい自然を耳にしていたので、一度は行ってみたいと思いました。新聞で募集したから、群馬県人ばかり三〇人くらい集まるのかと思っていましたが、当日行ってみて驚きました。三〇人どころではなく僕一人。他是東京の方々六人で、合わせてたったの七人。現代の高校生がいかに自然に興味、関心がないかよく分かりました。しかし、こんな状態では先が思いやられます。もう少し自分のまわりの環境を見直して自然の尊さを考え、知つても

らいたいと思います。

さて、僕が自然に興味、関心を抱くようになったのは、恥ずかしながら高校に入つてからでした。入学と同時に部活動がいくつか紹介された本をいただき、中で最も興味をひかれたのが生物部だったので。生物部では、三班に分かれ研究、活動していました。そこで野鳥班ではカワセミの生態研究を行つているとのことで「これは自分にむいている」と思つて入部しました。昔から野鳥は好きでしたし、専門的なことは知らなかつたけれど、いくつかの鳥は見分けることが出来ました。この時以来、野鳥を通して自然の尊さ、大きさということが良くなつてしまつた。」と言わされました。先生方はブナ林のところで「ブナの原生林は数少なくなつてしまつた」と言われました。考えのない人間達によつて、自然が破壊されいくのはとても残念なことです。しかし、尾瀬にはまだ人間の手の加えられていない自然が部分的に残っています。

また、心ない観光客によつて湿原が破壊されたり、登山道からはずれて植物を枯らしてしまうのも残念です。二日目に尾瀬ヶ原を歩いた時に、小さい子供達が多せい来ていて、人とそれちがう度に「こんにちは」と機械的に言つていたのにはあきれました。何んのために尾瀬に来るものすべてに感動しました。尾瀬に来たのは初めてだし、高山帯を歩くもの初めてなので、見るもの聞くものすべてに感動しました。また、道端にある見逃しそうな小さな草花を見つけて、名前や特徴のわかる先生方にも感動しました。今までは、野鳥を探して森の中に入つても小さな草花には気がつきませ

んでした。まして木の種類などは考へてもいませんでした。それが、この講座に参加した時以来、山を歩きたくてしようとしない気持ちになりました。野鳥だけでなく、花や木もみんな自分で見つけたいと思つました。先生方はブナ林のところで「ブナの原生林は数少なくなつてしまつた」と言われました。考えのない人間達によつて、自然が破壊されいくのが目立ちました。また途中の休憩する所には、一米四方の広さの湿原を殺して木道の破片が置き去りにされているのが目立ちました。まことにあきれました。体裁ばかり考えていて、大切な自然のことを考へない環境庁はいつたい何のためにあるのだろうかと思つてしまします。環境庁の役目をはたしていないように思われます。また、小屋から出る汚れで湿原が変わつてあるといふことも先生方から聞きました。実際にアシなどが異状に繁殖していました。改めなくてはならないことかもしません。

最後に、三日間お世話になつた先生方に心から感謝します。自然が造りあげた尾瀬を守つていく義務が人間にはあると思います。

ゴミを投げ捨てれば汚れるだけではなく植物が枯れてしまうこともあるでしょう。このような事によつて失なわれた自然是、二度と戻つできません。自然が造りあげた尾瀬を守つていく義務が人間にはあると思います。

最後に、三日間お世話になつた先生方に心から感謝します。



コメツガの年輪をしらべる
長径 70 cm 350年

尾瀬の文献を辿つて（4）

波戸場秀幸

『——前文略——。尾瀬を盛に人の訪ぶ様になつたのは、長蔵小屋が湖の東岸に移つてからであらう。——略——。そして今では尾瀬を訪ねる人が毎年数百人に上るといふ盛況である。

それにしても、何々アルブ

ス等という有象無象の集合地

とは異つて、尾瀬は静寂其者

である。太古の儘の森林は、昔ながらの姿で沼を囲繞し、鏡の如き水面は燧の倒影を映し、魚は群をなして水草の間を遊泳し、春来れば雪は解け、夏来れば花開き、秋到れば草木悉く錦纏を織りなし、冬には萬物皆深い積雪の下に眠つてしまふ。尾瀬は依然神祕境として残されて居る。そして未だ醜惡な人の手によつて禍されること極めて少ない。(略)

大正時代を代表する尾瀬関係文献と言えば、日本山岳会の『山岳』である。『山岳』第十九年第一号「尾瀬号」は大正十四年五月二十三日発行で、当時の定価壱円五十銭とある。過日、古書店で本書を目にし価格を見たら四千円余りするので驚いていたら、店主の「安価の方ですよ」との声に再び驚いた次第である。

『山岳』誌「尾瀬号」には、

高学府すら斯かる得難き道場

を捨てゝ顧みず、湿原の研究

としては、僅に干からびた日

光戦場ケ原に一瞥を与える位

に過ぎないのは、寛に解釈に

苦む処である。

殊に尾瀬の保護に至つては、内務省も之を天然記念物保護

区域として指定するの明と決

断なく、一方群馬県の所謂有

志は、国立公園の美名の下に

蹠蹠せんとし、利慾に汲々た

る輩は尾瀬ヶ原を貯水池に変

じて、発電に使用せんと企て

て居る。——後文略——

ここに引用した文章は武田

久吉氏の尾瀬再探記である。

大正時代を代表する尾瀬関

係文献と言えば、日本山岳会

の『山岳』である。『山岳』

第十九年第一号「尾瀬号」は

大正十四年五月二十三日発行

で、当時の定価壱円五十銭と

ある。過日、古書店で本書を

目にし価格を見たら四千円余

りするので驚いていたら、店

主の「安価の方ですよ」との

声に再び驚いた次第である。

『山岳』誌「尾瀬号」には、

高学府すら斯かる得難き道場

を捨てゝ顧みず、湿原の研究

としては、僅に干からびた日

光戦場ケ原に一瞥を与える位

と、目次があり、五十三点に及ぶ山岳・河川・湖沼・湿原・植物そして風景等の写真が図版となって掲載されている。

「尾瀬をめぐりて」の館脇

操氏は、武田久吉氏・山口成

一氏と共に大正十三年夏七月

に入山した記録を、武田久吉

氏が「尾瀬再探記」、山口氏

は写真図版をこの書籍に載せ

ている。五十六頁に及ぶ「尾

瀬をめぐりて」の項目は、

一、戸倉より尾瀬へ

二、尾瀬沼・小沼及沼畔

三、燧岳

四、沼山峠より檜枝岐へ

五、会津駒

六、三丈滝より尾瀬ヶ原へ

七、尾瀬ヶ原の檜枝岐小屋

八、至仏岳

九、鬼怒沼林道

十、鬼怒沼

十一、八丁の湯を経て日光湯本

1. 八丁の湯

2. 川俣温泉へ

3. 金田峠を越え日光湯本へ

1. 龍頭への裏道
2. 戰場ヶ原

と展開されている。

記述された文章を読んでい

くと、当時の尾瀬と、尾瀬へ

の入り方がじわじわと味わう

ことができる。

多くの日時を費して、じつ

くりと尾瀬をめぐる美しい程

の訪れ方は、今日のあわただ

しい日程で車で往復する尾瀬

行と雲泥の違いを見せつけら

れる。そして「はしがき」で

館脇氏が「区域は、西端は至

仮を境とし、尾瀬平を含み、

燧を入れて尾瀬沼に及び、北

は赤法華から沼山峠、南は戸

倉の上、山神附近より尾瀬峠

を、そして東は便宜上鬼怒沼

館脇にも、投げしまゝの警

附近より国境の林道を含ませ

ることにする。(略) 尾瀬とつ

きものゝ如く考えられて居る

会津駒にも、投げしまゝの警

見を採録した。」と、大正十三

年八月に述べていることは、

札幌の北大植物園に在り、農

学士として新進気鋭の植物學

者で、特に湿原研究に最も造

詣が深く、科学者であると共に

詩人である館脇氏と武田久

吉氏が紹介しているだけあつ

て、何か尾瀬の今日の課題を

提起していると思う。

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は

日本における自然保護運動の

発祥地・原点である尾瀬にお

いて、自然保護を考え、学び、

行動する「市民の会」です。

昭和四十六年八月尾瀬を通る

国際観光ルート沼田・田島線

建設反対運動の際に発足し、

その後幾多の困難を経ながら、

会員の努力によつて運動が続

けられています。

尾瀬を愛する皆さん、小さ

な力でも合せれば、一粒の雨

滴が大河になるよう大きな

力となります。どうぞ、この

運動にご参加下さい。そして、

日本の自然を守り、いつまで

も心豊かな人間生活を送ろう

ではありませんか。

日本での自然を守り、いつまで

も心豊かな人間生活を送ろう

ではありませんか。

調査研究、講演会など。

会の活動 ○会報「尾瀬の自

然」を発行 ○自然観察会

することにする。(略) 尾瀬とつ

きものゝ如く考えられて居る

会津駒にも、投げしまゝの警

見を採録した。」と、大正十三

年八月に述べていることは、

札幌の北大植物園に在り、農

学士として新進気鋭の植物學

者で、特に湿原研究に最も造

詣が深く、科学者であると共に

詩人である館脇氏と武田久

吉氏が紹介しているだけあつ

て、何か尾瀬の今日の課題を

提起していると思う。

尾瀬の自然を守る会

東京 6-138023

尾瀬保護のための 提言についての反響

(福島県尾瀬保護調査会々長)
馬場 篤

尾瀬保護についての提案御
発表の由、内容をわめて適切
で私が常に言っていたのと合
致しており強く思われます。

何とぞこの提言を関係機関ば
かりでなく、尾瀬を訪れる人
々の合意を得るために説得し
て下さい。福島側の郷池・沼
山峠間は土・日曜は厳重に車
規制を行いマイカーは全く入
れないようになり、若干とま
どいを感じている者もあるよ
うですがこれが止むを得ない
と理解されることを望んでい
ます。木道の破壊がひどくな
りましたか何とか考えなけれ
ばならない時が来ているよう
です。

昭和六十年度活動報告

- 一月。尾瀬保護のための提言
委員会を発足
- 三月。雪上自然観察会・戸倉
- 五月。野外植物研修会・大峰
- 。尾瀬ヶ原観察テラス等

六月。尾瀬自然保護指導員に
関し要望書提出・環境庁

(第二回目は八月に実施)

。尾瀬保護のための提言
を発表・環境庁記者クラブ

七月。奥鬼怒湿原及びスープ
一林道の現地踏査



1985
6/25
朝日

素晴らしい尾瀬どこに

十六日の日本テレビ「尾瀬は
病んでる」を見た。素晴らしい
尾瀬とは逆に、変わりゆく尾
瀬の姿だった。アヤメ平は景色
のよい楽園地だったが、その荒
れ果てた姿は想像以上だった。
湿原に入つて写真を撮る人必
要以上にスペースをとった植物
の説明など、貴重な尾瀬の植物
物を守ることより觀光優先だと
思ふ。尾瀬の自然を守るため、
こうした現実や自然保護運動の
人たちの活動をもっと知らせて
ほしい。(東京都港区・生井
利子・榮養士・34歳)

行事のお知らせ

第十回尾瀬の夕べ

日時 11月24日(日)

午後1時～4時
講演 「鳥と人と緑」

加藤 幸子氏

小池しげんの子代表
(第八十八回芥川賞受賞)

「かわりゆく尾瀬」

波戸場 秀幸氏

尾瀬自然保護指導員
「尾瀬保護のための提
言」について他

多くの方の参加をお待ち
しています。

入場無料

- 。尾瀬研修団を引率指導
書を提出・文化庁長官
- 。第七回尾瀬自然保護指
導員養成講座現地研修
- 十月。尾瀬全域一斉観察会
- 十一月。第十回尾瀬の夕べ

“尾瀬”解説ビデオ完成

- 。十三分の四季をとおしての
自然と保護の解説

製作 NHKサービスセ
ンター

企画 (財)日本自然保護協
会

監修 NHK
尾瀬入山者へのオリエンテ
ーションにぜひ使って下さい。

御希望の方は事務局まで
お問い合わせ下さい。

編集後記

37号をもつて今年の「尾瀬
の自然」も四回の発行を終え
新しい年を迎えるとしてい
る。今年、原稿をお寄せいた
だいた方々に心からお礼申し
上げます。

私達の共有の財産、尾瀬を
後世に残すためにも多くの自
然を愛する人々の力を今後共
結集して行きたいものである。
86年が素晴らしい年であります
様に……。

入会申し込み書 年月日 16
1年会員費2,000円を添えて申込みます。(学生1,000円)

名前(ふりがな)

男 女

現住所 〒() 年月日 自宅電話()
勤務先 MTS 年月日 電話()

事務局	編集	発行	発行者	発行日	第	尾瀬の自然を守る会
03 等学校 425 4481 43	区 標 3 1 33 1	〒 156	中島 岸 好人	昭和60年11月10日	37号	